

## ジャカルタのバリ人

鏡 味 治 也\*

### Hindu-Balinese in Jakarta

Haruya KAGAMI\*

This paper analyzes a Hindu-Balinese organization and its activities in Jakarta. In this predominantly Muslim city, Hindu-Balinese residents have formed an organization called *banjar* to obtain various facilities for their activities. It originates from the Balinese *banjar* organization, which is the customary fundamental residential unit, though in Jakarta it loses its obligatory character and can be classified as a voluntary association. Based on their *banjar* activity, Balinese in Jakarta construct their temples (*pura*), invite priests (*pedanda*) from Bali and support them. The temples are the base for Balinese activities such as cremation, periodical praying at full moon and dark moon, Hindu religious lessons for youth, and cultural activities such as traditional dancing and *gamelan* orchestra.

One of the interesting points of Hindu-Balinese activities in Jakarta is that participants adopt a more dogmatic and innovational style in the religious sphere than people in Bali. While they attach less importance to customary behaviour (*adat*) such as ritual clothes, they practice full-moon and dark-moon prayer, which has never been practiced traditionally in Bali and has only recently been introduced by the Hindu Council (Parisada Hindu Dharma Indonesia). Hindu-Balinese activities in Jakarta show an example of a new phase of Indonesian religious activity which contrasts sharply with the customary conservative local activity.

#### はじめに

「複合社会」(plural society), 「種族のモザイク」(mosaic of ethnic groups), 「都市のなかの国」(a country in a city)——インドネシアの都市は, 種族を軸にしていろいろと特徴づけられてきた。これらの表現に共通するのは, インドネシアの都市, なかんずく首都ジャカルタが, 多民族国家インドネシアの投影であるという認識である。[加藤 1986: 392]

インドネシアの都市研究の, 80年代半ばにおける総括と展望を行なったような論文を, 加藤はこう切り出している。<sup>1)</sup> ジャカルタで暮らすバリ人をここでとりあげようとする私の関心も

\* 金沢大学文学部; Faculty of Letters, Kanazawa University, Kadoma-cho, Kanazawa city 920-11, Japan

1) 加藤はその論文で ethnic group に相当する言葉として “種族” を用いているが, ここでは “民族” を用いる。

まさにその点にある。つまり、バリ島を本拠地とするバリ人が現代のインドネシアという国家の中でどのような位置に置かれているのか、特定の民族とそれを統合する国家とのかかわりのあり方を、首都ジャカルタというある種特異な状況の中に探ろうとするものである。

したがって、今日ジャカルタに暮らすバリ島出身の人びと、あるいはその子孫たちが、どのような経緯で移住してきたかについての歴史的、民族誌的な分析は、ここでの私の関心からはずれるし、それを検討する新たな資料も持ち合わせていない。歴史資料によれば、オランダ東インド会社によるバタヴィア成立以来、バリ人はその会社の下働きや西洋人、中国人の妻あるいは奴隷として、都市の住民の一部を構成してきた。1673年のバタヴィア城域内の住人リストにも、ラッフルズが公刊した1815年頃のバタヴィア市街地の住人リストにも、バリという小さな島の民族にしては意外なほど、他の民族よりも大きな比率をバリ人がバタヴィアで占めていたことがうかがえる。<sup>2)</sup> 17世紀初頭から19世紀半ばにかけて盛んに行なわれたバリ人の奴隷貿易は、バタヴィアの市民生活に、またバリ島の王国自体にも大きな影響を及ぼしたのである。<sup>3)</sup> しかし時代がくだって、1961年のジャカルタの住民リストを見ると、バリ人がそこに占める割合はぐっと少なくなる。<sup>4)</sup> この数値の方が、当然のことながら、今日ジャカルタで見られるバリ人の印象に近い。どのようにしてそうなったのかについては、新たな歴史的研究を待とう。

2) 1673年のリストでは、総人口27,068人のうち、オランダ人2,024人、ユーラシアン726人、中国人2,747人、Mardijkers (マラッカやゴアなどポルトガル植民地出身で、キリスト教に改宗して奴隷から自由民になった者) 5,362人、インド系イスラム教徒およびジャワ人1,339人、マレー人611人、バリ人981人、奴隷13,278人となっている [Abeyasekere 1989: 19-20]。またラッフルズの資料では、総人口47,217人のうち、ヨーロッパ人543人、植民地生まれのヨーロッパ人子孫1,485人、アラブ人318人、インド系イスラム教徒119人、マレー人3,155人、ジャワ人3,331人、ブギス人1,863人、マカサル人2,029人、バリ人7,720人、スンバワ人232人、マンダール人223人、アンボン人とバンダ人82人、ティモール人とブタン人24人、中国人と現地人混血605人、中国人11,249人、奴隷14,239人となっている [Abeyasekere 1983: 301]。さらに同じラッフルズ統治時代の1816年の奴隷登録リストをもとに Abeyasekereは、バリ人奴隷が当時の奴隷全体の約二割弱を占めていたとしている [ibid.: 291]。

3) この時期バリ島では小さな王国が分立して互いに戦いをくりかえしており、そうした戦争の際の捕虜、あるいは犯罪人や王家の奴隷などが、中国人ブローカーを介してバタヴィア等に売られていった [van der Kraan 1983]。国際貿易に供するこれといった産物がなかったバリの権力者たちにとって、それは重要な外貨獲得手段であり、その金で武器を買って有力な勢力にのしあがる者も現われた [Vickers 1989: 17]。いっぽうバタヴィアに送られた奴隷は、貿易会社の雑役や農業労働力として、また19世紀になると植民地政府の軍隊要員としての役割を担った [van der Kraan 1983: 329-334]。さらにヒンドゥー教徒のバリ人女性は、豚肉の料理ができるということで、とくに中国人家庭のお手伝いとして重宝されたという [Vickers 1989: 15-16]。この点は、1816年のバタヴィアの奴隷登録リストをもとにしたAbeyasekereの研究で、他民族出身の奴隷の七割以上がヨーロッパ人を主人としているのにたいして、バリ人奴隷の半数近くが中国人を主人としている、という分析結果にもあらわれている [Abeyasekere 1983: 304]。

4) そのリストによると、各民族の全人口に占める割合は、ブタウィ人22.9%、スンダ人32.8%、ジャワ人およびマドゥラ人25.4%、ミナンカバウ人2.1%、南スマトラ人1.2%、パタック人1.0%、北スラウェシ人0.7%、マレー人0.7%、南スラウェシ人0.6%、マルク人およびイリアン人0.4%、アチェ人0.2%、バンジャル人0.2%、東部ヌサトゥンガラ人0.2%、バリ人0.1%、不明1.3%、中国人10.1%、その他の外国籍0.6%である [Abeyasekere 1989: 191]。

以下で扱うのは、今日のジャカルタに暮らすバリ人の姿である。ところが、現在インドネシアでは、“バリ人”といった民族の違いを示す符牒は住民票などいっさいの公的記録に表されないため、この“バリ人”をジャカルタで探すことがまず問題となる。何をもってバリ人と見なすのか、バリ人としてのアイデンティティの拠り所は何なのかという点は、今日のインドネシアにおいて非常に微妙でやっかいな問題をはらんでいる。すくなくともインドネシア政府の側は民族の類別を公式には認めていないわけで、国内各地域の異なる慣習や文化を云々するときには、“何々族の”と言わず“何々州の”という類別を一貫して用いている。人びとのなかにも、何々族というよりインドネシア人としてのアイデンティティを強くもつ人がでてきている。<sup>5)</sup> にもかかわらずいっぽうで、人びとの日常会話の中ではジャワ人、バリ人といった言葉がひんぱんに交わされ、各民族のイメージはステレオ・タイプ化されて軽口や漫談の種にまでなっている [加藤 1986: 399; 村井 1984: 75-76等参照]。“ジャカルタのバリ人”というところからえかたをした場合、その実像は上のような諸相のあいだで宙づりになってしまいかねない。

以前別のところで私は、ジャカルタで発行されている週刊誌の記事を材料にして、バリ人について他の人びとがもつイメージと、それに対するバリ人の側の反応を探ったことがある [鏡味 1991]。そのなかでバリ・ヒンドゥー教というものが、バリ人を外からとらえる際にも、またバリ人自身のアイデンティティの拠り所としても（その両者の内容は必ずしも一致するものではないが）、重要な要素のひとつであることを指摘した。今回ジャカルタのバリ人の実態をとらえようとするにあたって、この点からのアプローチを試みた。<sup>6)</sup> 具体的には、ジャカルタにいくつか建立されているバリ・ヒンドゥー寺院とそこに集まる会衆に目を向けることにした。その背景には、バリ人はバリ・ヒンドゥー教徒であり、バリ人としてのアイデンティティを保つにはヒンドゥー教徒としての行ないが欠かせないであろうという、いささか同語反復的な想定があったことを明記しておかなければならない。以下の記述はそのヒンドゥー教寺院とそれを支える組織が主な対象となる。

5) たとえばバリ出身の著名な作家プトゥ・ウィジャヤ Putu Wijayaは、日刊紙『コンパス』日曜版 [Kompas 3 Oktober 1991] のインタビューで、自分はバリ人であるよりもインドネシア人であるという意識をより強くもっていると述べている。彼の生家は Gusti Ngurah というタイトルを継承する貴族家であるが、彼はこのタイトルも作家名から削っている。ただ、彼の場合、バリの伝統芸能でなくインドネシアの近代文芸・演劇が自分の活動分野であるという自負や意欲が、そうした意識に影響を与えていることは否定できない。

6) 本稿のもとになる調査は、「インドネシアにおける地方文化と国民文化・大衆文化の関係」を研究課題とし、日本学術振興会特定国派遣研究者事業の費用をもとに、1991年7月26日から1992年1月24日にかけてジャカルタとバリ島で行なったものである（インドネシア学術局 [LIPI] 調査許可番号 1518/V.3/KS/1991）。ただし、バリ島での村落住み込み調査に約4カ月をかけたため、ジャカルタでの調査活動は断片的な段階にとどまらざるを得なかった。したがってここでの報告も予備的な性格のものであることを断っておく。日本学術振興会はじめ、調査の実現に協力していただいたインドネシア学術局、ジャカルタ特別市政府、資料を提供していただいた宗教省ヒンドゥー教・仏教局、ジャカルタ地方宗教局、バリ州政府ジャカルタ事務所、およびジャカルタ南部の Klian banjar の Nyoman Mastra 氏、Pura Amerta Jati 職員の Putu Ardana 氏に、この場を借りて心よりお礼申し上げます。

## I ジャカルタのヒンドゥー教徒と寺院

インドネシア共和国独立以後、インドネシアにおいて圧倒的少数派であるヒンドゥー教徒は、イスラム教徒やキリスト教徒にまじってなんとかその地歩を確保しようと努力してきた。その結果、それまでバリ島の土着の信仰だったバリ・ヒンドゥー教は、1958年に正式にインドネシア国家の認定する宗教のひとつとなり、その後さらに国内の他のさまざまな土着信仰を包含することのできる枠組みとしても機能することになった。<sup>7)</sup> こうして現在、ヒンドゥー教の国家宗教化を推進してきたヒンドゥー教評議会 (Parisada Hindu Dharma Indonesia) のジャカルタ支局員の話では、インドネシアにおけるヒンドゥー教徒としてバリ人のほかに、インド系ヒンドゥー教徒、シーク教徒、カリマンタンの Kaharingan 教徒、トラジャの Aluk To Dolo 教徒、さらにカロ・バタック人、ジャワのテンゲル人、西ジャワのバドゥイ人、中部ジャワの Kejawen などが含まれるという。

この、一地方の土着信仰から国家の認める宗教の一部門へという変遷のなかで、教義の体系化、合理化などバリ・ヒンドゥー教の内部で変化が認められると同時に、もともとバリ人を母体とし対象としていたヒンドゥー教組織とその活動も、しだいにバリという枠をこえてインドネシア各地に飛び火しつつある点が指摘できる。その拡張のあり方も、国内移民としてバリ島の外へ移住したバリ人の集落のもとに祭司を派遣し寺院を建立するといったかたちでの進出から、バリ以外の土着宗教をヒンドゥー教の名のもとにとりこむといったかたちまで、いろいろある。とくにその後者の場合については、バリ・ヒンドゥー教を軸とする教義や祭司制度や祭式体系を、それぞれの土着のそれとどう折り合いをつけるかという点で、大きな問題をはらんでいる [福島 1991参照]。その検討はここでの主題の範囲を越えるが、ジャカルタのヒンドゥー教徒といった場合もこうした脈絡のなかで考えなければならないことを確認しておく必要がある。

ジャカルタのヒンドゥー教徒、およびヒンドゥー寺院と祭司 (補佐を含む) の数のここ十年ほどの推移は、ジャカルタ地方宗教局 (Kanwil Agama DKI Jakarta) の資料によると表1のようになる。ここでいうヒンドゥー教徒には、バリ人のほかにインド系ヒンドゥー教徒、シーク教徒、そして上述したインドネシア国内のさまざまな土着宗教の信奉者が含まれる。<sup>8)</sup>

行政管轄上ジャカルタは中部、北部、西部、南部、東部の五つの区域に分けられる。表2は

7) ヒンドゥー教の認可について、より正確には、1958年に宗教省内にバリ・ヒンドゥー部局を置くことが認可され、それが実際に実現したのは1962年になってからということのようである [Forge 1980: 226; 福島 1991: 109]。なお、独立以後のインドネシア国内におけるヒンドゥー教徒の経緯は、福島 [1991: とくにその前半部] が要領よくまとめている。

8) 教徒の数が急激に増えている年があるのは、大量の改宗者や移民があったというよりは、それまでヒンドゥー教に含められていなかった一派が含められるようになったか、あるいは統計の対象が広げられたかによるものと思われるが、よくはわからない。

表1 ジャカルタのヒンドゥー教徒、寺院、祭司数の推移

年	教徒 (人)	寺院	祭司 (補佐を含む) (人)
1979年	23,010	9	38
1980	35,515	9	40
1981	36,843	10	40
1982	37,040	12	45
1983	37,916	12	50
1984	38,521	14	60
1985	39,623	14	70
1986	40,843	14	75
1987	41,660	16	78
1988	44,014	16	85
1989	44,894	16	88
1990	52,846	16	88

表2 ジャカルタのヒンドゥー教徒の区域別分布

ジャカルタ中部	6,176
北部	4,897
西部	3,394
南部	14,860
東部	15,602
計	44,929

出所：宗教省ヒンドゥー教・仏教局資料

出所：ジャカルタ地方宗教局資料

宗教省ヒンドゥー教・仏教局の資料によるジャカルタの区域別ヒンドゥー教徒の分布だが、そこからどの区域にヒンドゥー教徒が多いかがわかる。<sup>9)</sup> 中部は官公庁街を、北部は港を含む戦前からの旧市街地で、いっぽう西部、東部は商業・住宅地区、南部はおもに住宅地区である [古屋野 1987: 487-489]。

教徒たちの活動に応じて、ジャカルタ各区域にはヒンドゥー寺院が建てられ、祭司がいて儀礼を行ない、またそこでは日曜学校が開かれ、教師がヒンドゥー教を教えている。ジャカルタ地方宗教局の資料による表3は、それらの区域別分布を表している。バリ・ヒンドゥー式の寺院とインド式の寺院が区別してあるのは、その建築様式も会衆もはっきり違うからであろう。ヒンドゥー教に含まれる他の土着宗教は、現在のところ寺院というかたちでの礼拝所をもっていないようである。また祭司、祭司補佐の項には、バリ系の者もインド系の者も一緒に掲げている。

表3に挙げられた16のヒンドゥー寺院の詳細は、同じくジャカルタ地方宗教局のリストによると表4のとおりである。<sup>10)</sup> 1から4まではインド系ヒンドゥー寺院で、それぞれの所在地は

9) ここでの数字は1991年夏の聞き取りの時点で最新のものとして示されたものである。しかしそれは宗教省本局に報告され集計されたもののうちで最新ということであって、表1と比べ合わせると、1989年現在のものようである。なお、表2の合計数44,929人は、表1の1989年の教徒数よりほんのわずが多い。その理由は分からないが、役所によって資料の数値が異なるのはよくあることである。

10) リスト中の認可年は、先の表1の年次別寺院数と一部食い違うところがある。なお、後述するように、実際に寺院が完成して使われるようになるのはさらに遅れることがある。リスト中、所在地のところに\*印をつけた寺院は、その地区のバリ人の組織（後述するバンジャル）の本部が置かれているものである。

また、7番目の寺院はジャカルタ郊外のタマン・ミニ公園内に建立されたものである。

表3 ヒンドゥー寺院, 祭司, 教師, 生徒数の区域別分布(1990/91)

ジャカルタ:	中部	北部	西部	南部	東部
バリ・ヒンドゥー寺院 (pura)	0	1	1	4	6
インド系ヒンドゥー寺院 (kuil)	2	2	0	0	0
祭司 (pandita)	4	2	2	2	1
祭司補佐 (pinandita)	7	8	13	20	27
教師: 常時	3	0	2	5	9
: 臨時	0	8	16	40	48
生徒	460	553	782	1,650	1,980

出所: ジャカルタ地方宗教局資料

表4 ジャカルタのヒンドゥー寺院

名称	所在地	認可年
1. Canti Mandir	(未確認)	(不詳)
2. Ciwa Mandira Temple	(未確認)	(不詳)
3. Sikh Temple	(未確認)	1952
4. Sikh Gurdwara Temple	(未確認)	1956
5. Pura Aditya Jaya	東部*	1969
6. Pura Dalem Purna Jati	北部*	1970
7. Pura Agung Kerta Bumi	南部	1973
8. Pura Mustika Dharma	東部	1974
9. Pura Chandra Prabhu	西部*	1976
10. Pura Ksatria Loka	南部	1980
11. Pura Amerta Jati	南部*	1982
12. Pura Amerta Sari	南部	1982
13. Pura Tri Bhuana Agung	東部	1984
14. Pura Prajapati Purna Pralina	東部	1985
15. Pura Tirta Buana	東部	1987
16. Pura [名称不詳]	東部	1987

出所: ジャカルタ地方宗教局資料

未確認ながら, 表3で見るとジャカルタ旧市街地の中部区と北部区に二つずつ位置するものである。その設立年度もふるく, さきに述べたバリ・ヒンドゥー教がヒンドゥー教として正式に認められた1958年以前にすでに寺院として認可されている。それにたいしてバリ・ヒンドゥー系の寺院は60年代末以降, つまりスハルト政権成立後に続々と建立されるようになった。特に南部と東部に集中しているのは, 信徒数とその地区に多い(表2参照)ことのほかに, 中部や北部には新たな敷地を確保できる余地がもうあまり残されていないことも考慮しなければならない。

1985年の人口統計でジャカルタの人口は7,913,526人, 表1の1985年の数値とあわせるとヒ

ンドゥー教徒の割合はそのうちの約0.5%となる。<sup>11)</sup> ジャカルタのバリ人ヒンドゥー教徒はそのさらに一部を占めていることになる。

## II ジャカルタのバリ人組織

ジャカルタの少数派であるヒンドゥー教徒の、そのまた一部であるバリ人たちは、その、主として宗教的な活動の不便を補うため、一種の相互扶助組織を作っている。それが、ジャカルタの五つの区域にそれぞれ結成されている Banjar Suka Duhka Hindu Dharma と、その統合体としての Suka Duhka Hindu Dharma DKI Jakarta である。バンジャル (*banjar*) というのはバリ島では人びとにとってもっとも基本的な地縁集団で、ふつう村 (*desa*) の下部単位にあたり、村の共同作業や成員の葬儀の世話の単位として、暮らしていくうえでその加入が欠かせないものである。ところがジャカルタでは、バリ人といえども各地区の住人として登録され生活しているわけだから、そのうえにさらにバリ島でのような慣習的に強制力をもつ集団を作ることはできず、ここではもっぱら互いの不便を助け合う任意加入の団体となっている。それが名称にスカ・ドゥカ (*suka duhka*) という言葉の付されている理由で、原意は“喜びと悲しみ”という意味だが、それを分かち合おうとする有志の団体であることを表している。

ジャカルタのバリ人が直面する生活上の不便とは、もっぱら宗教上の慣習に由来する。いちばん大きな問題は葬儀で、火葬にするヒンドゥー教徒は、土葬のイスラム教、キリスト教がほとんどのジャカルタで、火葬場をさがすことから非常な困難に直面する。また結婚式などでも、独自の祭司を必要とする。こうしたことから、以前は葬式や結婚式など何かあるごとにジャカルタのバリ人たちはバリ島に帰ってそうした儀式を行っていた。そうした不便を解消するため、1970年代半ばに、ジャカルタ各地区のバリ人たちが集まってそれぞれバンジャルを結成するようになった。そしてそうした儀式がジャカルタでも行なえるように、各地でバリ・ヒンドゥー寺院の建立が進められた。それらジャカルタの五つの区域のバンジャルは、1983年に集まってひとつの協会、すなわち前出の Suka Duhka Hindu Dharma DKI Jakarta を作って今日に至っている。

現在五つのバンジャルは、それぞれの地域にある寺院のひとつ（表4のリスト中\*印をつけた寺院）に本部を置いて活動している。本部といっても常駐の職員がいるわけではなく、バンジャルの役職にある者も皆それぞれに勤めをもっているの、寺院を活動の本拠にしているといったほうが正確である。なお、ジャカルタ中部区はまだ寺院をもっていないので、バンジャ

11) 1985年のジャカルタの人口は *Statistik Indonesia* [1989: 44] による。なお、同書162-163ページには1985年度のジャカルタ人口の宗派別割合が出ており、それによるとイスラム教徒85.1%、カトリック教徒2.6%、プロテスタント教徒7.9%、ヒンドゥー教徒0.2%、仏教徒4.2%、その他0.1%とある。ここでのヒンドゥー教徒の数字は上で算出したそれと食い違うが、その理由はわからない。

ルの本部は成員の私邸に置き、儀礼やお祈りは東部区にある寺院（表4の5）まで出かけて行なっている。

いっぽうジャカルタ全体の協会の本部は、バリ州政府がジャカルタ中心部のチキニ地区にかまえる事務所（Kantor Pemda Bali）に置かれており、役員の会合もここで毎月第一金曜日に行なわれている。なおこの事務所にはインドネシア・ヒンドゥー教評議会（Parisada Hindu Dharma Indonesia）のジャカルタ支部も置かれており、その定例会議が35日に一回、Buda Kliwonの日にここで開かれている。<sup>12)</sup> このバリ州政府のジャカルタ事務所の存在と役割は、ジャカルタとバリとの関係を考えるうえで非常に興味深い。

バンジャルを結成し寺院を建立することで、ジャカルタに生活するバリ人の不便さはずいぶん軽減された。現在ジャカルタのバリ人の火葬は、一括して北部区にある寺院（表4の6）で行なわれる。この寺院には、バリ島でそうであるように、葬儀に関係する寺院の名称（Pura Dalem）がつけられており、火葬の前にいったん埋葬するための墓地（バリ島でいう *sema*）も備えられている。しかも、これもバリの村でそうであるように、この葬儀と関係する寺院はジャカルタのなかでももっとも海よりに位置する寺院である。葬儀の手配は、例えば火葬の許可といったことも含めて、頼めばバンジャルが助けてくれる。また、信徒の要請でバリ島から祭司が招かれ、現在4人のバリ・ヒンドゥー祭司（*pedanda*）がジャカルタに住んで活動している。このうち2人は、それぞれ東部区と南部区のバンジャルの本拠となる寺院（表4の5と11）のすぐ脇に住んで、信徒の家庭の儀礼のほかにもその寺院の定期的な儀礼の世話もしているが、あとの2人（いずれも西部区に在住）は特定の寺院に結びつくことなく、信徒から要請があればどこでも出かけて行って儀礼を執り行なうといった活動をしている。こうしてジャカルタ在住のバリ・ヒンドゥー教徒も、その宗教的な活動の面でかなりの便宜を手にするようになるようになったのである。

### III ジャカルタ南部区のバンジャル

ジャカルタのバンジャルの組織と活動を、南部区のバンジャル（Banjar Suka Duhka Hindu Dharma Jakarta Selatan）を例にとって見てみよう。この組織は1975年に、それまで小さなグループに分れて私的に集まっていた地区のバリ人たちが、前に述べたような不便をすこしでも軽減しようと、ひとつにまとまって創設された。バンジャル結成後、寺院を建てるための委員会が組織された。その財政係を担当した者が海軍に務めていたこともあって、海軍の所有して

12) ヒンドゥー教評議会は、インドネシア独立後の国家体制のなかで、特にバリのヒンドゥー教の地位を固めるのに大きな役割を果たした機関で、現在でも政府公認の最大のヒンドゥー教組織となっている。福島 [1991] 参照。



いた土地を寺院の敷地として寄付してもらうことに成功した。建設費用には、成員ひと世帯につき毎年二万ルピアずつの寄付を調達したほか、大統領府やバリ州政府からも大口の寄付を得た。建立は1981年頃から始められ、1985年7月7日に開山式が催された。<sup>13)</sup> この寺院が、現在バンジャルの本拠が置かれる Pura Amerta Jati (表4の11) である。ただし建設は完了したわけではなく、現在も新たな祠の建立やすでに建てられた門の彫刻などが、資金の集まるのを待って続けられている。

この寺院の脇にはひとりのバリ・ヒンドゥー祭司 (*pedanda*) と、その仕事や生活の世話をしお付きの女性たち (*sisia*) 数人が住んでいる。これは寺院ができたあと、南部区のバンジャルの人びとがヒンドゥー教評議会に頼んでさがしてもらって招いた祭司である。この祭司はロンボク出身の女性で、故郷で祭司をしていた夫が亡くなったのを機に、祭司としてジャカルタにやってきたという。<sup>14)</sup> 彼女らの生活費の一部はバンジャルで負担し、彼女らは寺院にかかわる儀礼の世話に責任をもつ。このほかに祭司は、信徒の家で行なわれる結婚式などに呼ばれて行って儀礼を行なうが、そうした際の謝礼は彼女の収入になる。

バンジャルの組織は、3年ごとに選出されるひとりの長 (*klian*) を置き、その下に、バンジャルの活動領域を四つに分け、それぞれひとりずつの長 (*ketua*) を立てて役員を構成している。四つの活動領域はそれぞれ内務 (Bidang Organisasi dan Pengembangan), 財政 (Bidang Dana), 教育 (Bidang Pendidikan), 文化 (Bidang Kebudayaan) である。バンジャルの実務はおもにこの5人の役員によって切り盛りされている。そのほかに、いろいろな行事の実行部隊として青年部会 (Keluarga Pemuda Suka Duhka Hindu Dharma) といったものも組織されている。

バンジャルの成員は、1989年からバンジャルの長を務める N・M 氏によると、現在約600世帯、3,000人とのことである。<sup>15)</sup> これは、彼によると、ジャカルタ南部区に住むバリ人の99%にあたるだろうという。バンジャルの成員は、住む地域によって17のテンペック (*tempek*) という下部単位に分けられ、ひとつのテンペックはさらに数世帯からなるシノム (*sinom*) に分けられている。<sup>16)</sup> これは種々の伝達の効率をよくするためだという。

13) この開山式の日になんで、寺院の最大の行事である創設記念祭 (*odalan*) は毎年一回、ヒンドゥー・バリ暦の第一番目の満月の日 (*Pumama Kasa*) に決められ、1991年は7月27日に行なわれた。

14) ジャカルタに4人いるバリ・ヒンドゥー教祭司のうち3人が女性である。ジャカルタの信徒が女性の祭司を求めたわけではなく、わざわざ故郷を離れてジャカルタまでやってくるには、この南部区の祭司のように、夫が亡くなったというような契機がそれぞれあったものと思われる。

15) ジャカルタ各区域のバンジャルの成員数は、バリ州政府ジャカルタ事務所のヒンドゥー教評議会ジャカルタ支局で現在集計を進めているが、その支局員の話では、私の調査時点で正確な数字はまだ各バンジャルから届いていないとのことであった。

16) テンペックというのはバリ島でもバンジャルが大きくなった場合にとられる下位区分で、葬儀や共同作業の単位となっている。シノムについては、バンジャルの長の補佐役としてクシノマン (*kasinoman*) という役職があるとバリ語の辞書には書かれているが、バリで私が調査している村にはそうした役職名はないし、シノムという語が地域集団の単位として使われているのを見聞した覚えもなく、その由来は分からない。

バンジャルのおもな財源は会員からの会費で、これはひと世帯につき毎月500ルピアである。寺院の電気代や儀礼の費用、祭司の生活費などがこれでまかなわれる。なお寺院には寄付金箱が備え付けてあり、寄付金を随時受け付けている。寺院の改築など特別の事業のためには、そのための寄付金集めが必要となる。

教育活動の中心は、毎週日曜日に寺院で開かれる日曜学校 (*Peseraman Kemangraya*) である。行なわれる授業科目はヒンドゥー教 (*Agama Hindu*) で、小学校から高校までの子弟たちおよそ300人が参加し、段階別に時間を区切って朝から夕方まで授業が行なわれる。<sup>17)</sup> 教えるのはヒンドゥー教教師の免許をもった専門の教師があたる。バリ島などでは一般の小学校から、宗教の時間としてヒンドゥー教がすでにカリキュラムに組み込まれているが、イスラム教中心のジャカルタでは、宗教の時間というとイスラム教の授業になってしまう。そのため、ヒンドゥー教の信徒の子弟のためにこうした学校外での授業が用意されているわけで、この日曜学校での授業は生徒のそれぞれの母校で正式の単位として認められるものである。

文化面での活動としては、ガムラン楽団 (*Seka Gong*) や伝統舞踊教室 (*Sanggar Tari*) があげられる。ガムラン楽器は寺院内の建物に保管され、有志が集まって練習し、祭りの際などに演奏を披露する。

バンジャルが結成される大きな要員であった相互扶助について見ると、会員の葬儀の世話をする単位は、バンジャル全体ではなくその下部単位のテンペである。ただし火葬の許可をとったり、あるいは交通事故で死亡した場合の警察での処理など、何か特別の問題が生じた場合にはバンジャルが折衝に当たることもある。なお、すでに述べたように、バンジャルやテンペはジャカルタにおいては強制力をともなうものではなく、あくまでも加入者の自発的意思にもとづく団体であるため、他の会員の助けを借りないで自分の家族だけで葬儀などを行なってしまっても、それでできるのならそれはその個人の自由ということになる。

結婚式やその他の通過儀礼については、これはバリ島においてもそうであるが、バンジャルが関与することはなく、各自の家に祭司を呼んでそれぞれ個人的に儀礼を行なっている。こうした際に祭司に支払われる謝礼は、バリ島での場合と同じく祭司自身の収入になる。

寺院で行なう活動としては、年に一度の寺院の創設記念祭 (*odalan*) やガルンガン (*Galungan*) などのヒンドゥーの祭日のお祈りのほか、毎月満月 (*punama*) と暗月 (*tilem*)<sup>18)</sup> の夜に会員の有志が集まって合同のお祈りをしている。こうした際には祭司とその手伝いたちが聖水やお供えを用意し、会員のなかの有識者、経験者が祭司の補佐役 (*pinandita*) を務める。<sup>19)</sup>

17) 確認していないが、表3の教師数や生徒数を見ると、南部区の他の寺院でもそれぞれ日曜学校が開かれているようである。

18) *tilem* はまったく欠けてしまって見えない月のことであり、ここでは“暗月”としておく。

19) ジャカルタの寺院には、バリ島の寺院の場合のような寺院つきの祭司 (*pemangku*) は置いていない。

このなかで私が実際に立ち会うことができたのは、1991年8月10日の暗月の夜のお祈り (*sembahyang bulan tilem*) だった。インドネシア語で呼ばれていることからわかるように、満月や暗月の夜のお祈りを寺院に集まってすることは、バリ島の村々では見たことがない。

当日、陽が暮れかかるころ、自家用車やバイク、あるいはミニ・バスなどの公共機関を利用して、参拝者たちが三々五々集まってくる。服装はズボンやスカートなど平服がほとんどだ。寺院脇には屋台が設けられ、祭司のお付きの女性たちが豚肉を使ったバリ風の料理や菓子を出している。ラワル (*lawar*, 生肉をみじんに刻みながら香辛料と和えたもの)、サテ・カブレット (*sate kabet*, 挽肉を串に巻き付けて焼いたもの)、トゥム (*tum*, 肉とココヤシの果肉を刻んでバナナの葉に包み蒸したもの) など、バリのお祭りのごちそうが並んでいる。このなかで、ラワルはバリではふつう豚の生血をからめるが、ジャカルタに出たバリ人の口には生臭すぎるというので、ここでは生血は使っていないという。やってきた人びとは、お祈りの時間を待つあいだ、あるいはお祈りをすませてから、ひと時バリの味に舌つづみをうち、あるいは買って持ち帰る。

6時を少しまわったころ、それまでにやってきた人およそ六、七十人を集めて1回目のお祈りが寺院の内陣で始まる。人びとの服装は、やってきた時の平服に儀礼用の腰ひもを巻いただけの人がほとんどで、バリ島なら寺院見物に来た観光客といった態である。なかに一部、家から着てきたか、あるいはここで着替えたか、正装の人がちらほら混じる。<sup>20)</sup> 人びとは内陣の中庭に、この寺院の中心となる至高神を祀る祠 (*Padmasana*) に向かって腰をおろし、祭司の先導で祈りを捧げ、聖水を受ける。こうして、やってきた順に何回かに分れてお祈りをし、済ませた者は居合わせた知り合いとしばらく雑談をしたあと、また三々五々帰って行くというのが、ジャカルタ南部区の Pura Amerta Jati で行なわれた暗月の夜のお祈りだった。

#### IV バリ人とヒンドゥー教

ジャカルタに住むバリ・ヒンドゥー教徒の活動を見ると、バリ島でのそれとは微妙に違いがある点に興味を引く。上の限られた資料から一般化をすることは慎まなければならないが、そのいくつかの点についてはすでに指摘してきた。

ジャカルタのバリ人が、なによりもその葬儀などの際の不便を軽減するためにバンジャルを組織するようになったことはすでに述べた。その組織は、バリ島での慣習に準じてバンジャルと名付けられているが、バリ島でのように強制力をもったものでない点に大きな違いがある。

20) 平服が多かったのは、暗月の夜の祈りという、それほど特別でない催しだったからかもしれない。1981年にジャカルタの別の寺院で行なわれた創設記念祭 (*odalan*) では、参加者のほとんどがバリの儀礼用の正装をしていた。

バリ島では葬儀以外にも、道路の補修など域内のさまざまな公共活動がバンジャルを単位に行なわれるほか、その成員の住む屋敷地はそのバンジャルが属している慣習村 (*desa adat*) の共有地として、今も政府の土地税がかけられていないなど、バンジャルへの所属は生活に欠かせないものとなっている。それに対してジャカルタの住民としての所属先はジャカルタ市の下部単位である町区 (*kelurahan*) であり、それに重複するようなバンジャルが任意団体であることは、ジャカルタという状況のなかでは当然のことと言える。バリ島ではバンジャルと慣習村にかぶさるように行政バンジャル (*banjar dinas*) と行政村 (*desa dinas*) が置かれ、それが政府の末端の機関になっているが、ジャカルタではバリ人の慣習的な組織は政府の公式機関からは除外されているのである。

ところが、バンジャルが寺院を建立して活動を始めると、その寺院はジャカルタ地方宗教局の管轄下に置かれることになる。建立には大統領府から寄付が寄せられ、寺院で活動する祭司や教師も宗教省に登録され、日曜学校の「ヒンドゥー教」の授業は正式の単位として学校で認められる。つまりヒンドゥー教徒としての活動は、ジャカルタの行政のなかにしっかりと位置を占めているのである。

宗教局の管轄下に置かれることになった直接の結果ではないが、ジャカルタのバリ・ヒンドゥー寺院とそこでの活動は、バリ島でのそれと比べていくつかの違いを見せている。前節で紹介した南部区を中心とする寺院は、至高神を拝する祠 (*padmasana*) をその内陣の中央に据えている。これはそれぞれの寺院の神の宿る祠を中央に置くバリ島の伝統的な寺院のパターンとは異なる。またこれもバリ島での慣習ではない満月・暗月の夜の礼拝が定期的に行なわれている。いずれも、ヒンドゥー教の国家宗教化を進めるヒンドゥー教評議会が、その理念を実践するべく、バリ島の州都デンパサールの中央広場脇に建てた寺院 Pura Agung Jagatnatha のスタイルとそこでの活動を踏襲している [Forge 1980: 299; 福島 1991: 112-113]。<sup>21)</sup> ジャカルタの寺院へのヒンドゥー教評議会のかかわりがどの程度のものであるか確かめてはいないが、祭司の斡旋を評議会に頼んでいることなどからみて、直接・間接の指導があることは十分に想像できる。

さらに、寺院での活動ではないが、ジャカルタのヒンドゥー教徒のなかでも熱心な者は、日の出と正午と日の入にする一日三回のお祈り (*tri sandya*) を家庭や職場で行なっているという。これもヒンドゥー教の整備過程のなかで奨励されるようになったもので、伝統的な慣習ではなかった。これを集まってするのは、バリ島では学校や役所の朝礼の場くらいである。ジャカルタではとくに若い世代のなかにこれを励行するものが見られるという。

こうして、ジャカルタのバリ人のヒンドゥー教徒としての活動は、バリ島でのそれよりずっ

21) ただし Forge が言及しているような、お祈りのあとの祭司による説教はジャカルタ南部区の寺院では行なわれていなかった。

と教条的、原理主義的なものになっている。これは、新たに組織された運動としてヒンドゥー教評議会の指導を強く受けたという面もあろうが、それよりもジャカルタという異民族に取り巻かれた状況に身を置くバリ人たちが、自分たちの姿勢として自ら選択したものと私は考える。それがヒンドゥー教評議会の方針に一致するのは、ジャカルタのバリ人の置かれた状況が、インドネシアにおけるヒンドゥー教の立場と相似の関係になっているからである。

ここで興味深いのは、宗教に比して慣習の側面があまり強調されない点である。バンジャルの組織のような地域に根ざした慣習がジャカルタに持ち込めるようなものでないことはすでに述べた。しかし、やろうと思えばできるお祈りの際の服装にしても、バリ島でのような正装をしている者は少ない。これはやはり聞いてみると、ジャカルタでそこまでは恥ずかしいから、ということであった。バリ島では正装をしていれば（男は鉢巻、女は伝統的な髪結い型をするので）ヘルメットを着用せずにオートバイに乗っても見逃されるし、県の警察長官が地域の催しに出席した際に警察の制帽のかわりに伝統的な鉢巻をしていた写真が、インドネシアの総合週刊誌に、なかばからかい気味に掲載されたこともあった [Tempo 11 Mei 1991: 6]。このようにバリ島では慣習が国の規則にさえも優先するのに、ジャカルタでは“恥ずかしい”ものとして脇に押しやられている。ここに、それぞれの民族の慣習というものがインドネシアのなかで占めている微妙な位置を見てとることができる。<sup>22)</sup>

バリ島では慣習が強調され、ジャカルタではそれが抑制されるということは、上で述べたそのそれぞれの場所でのヒンドゥー教のあり方の違いと表裏をなしている。I 節で述べたように、バリ・ヒンドゥー教徒たちは、国家の認める宗教のひとつとしての地歩を固めるために、慣習の側面からではなく教義の面から理論や実践の改革を進めてきた。それではジャカルタのバリ・ヒンドゥー教徒は、国民統合を進める政府のおひざ元の住民として、バリ島のバリ人がこれから向かう姿を先取りしたものと受け取っていいのか。事態ははたしてその方向に直線的に進んでいくのだろうか。

数年ごとに開催されているヒンドゥー教評議会の第6回全体会議 (Maha Sabha) が、1991年9月にジャカルタで開かれた。<sup>23)</sup> そこで大きな問題になったのは、バリ島に置かれているヒンドゥー教評議会の本部をジャカルタに移転するかどうかについてであった。その様子を、報道で紹介されたものから追ってみると、討議の中で中部カリマンタンの Kaharingan 教徒の長は、心情的に言ってインドネシアのヒンドゥー教の拠点バリ島にあり、移転は必要ないと述べ、バタック出身で中部ジャワで長年祭司を務める者は、ヒンドゥー教がいつまでもバリ人だ

22) 類似のことを山下 [1986: 430, 註15] はウジュン・パンダンに住むトラジャ人の場合について述べている。

23) 福島 [1991: 113] によると、ヒンドゥー教評議会全体会議は1964年に第一回、1968年に第二回と四年ごとに行なわれてきたとあるが、後述する日刊紙「バリ・ポスト」のプトゥ・スティア署名記事 (1991年9月26日付) によると近年は五年に一度の開催のようである。

けのものでなく国民レベルのものになるために、移転したほうがよいと発言した。移転賛成組の意見として大きかったのは、ジャカルタに本部がないと、インドネシアの宗教界全体の催しに対処するのが遅れたり、国からの援助額が小さく見積られたりするから、というものであった。反対の理由としては、評議会の幹部を占める宗教指導者たちが、その最大の現場である（インドネシアのヒンドゥー教徒の四割が住むという）バリ島を離れては、信徒の指導が満足に行なえない、とするものである。各州代表の意思表示を集計したところ、移転に賛成が24、反対が3であったという。こうしたなかで、この問題をとりまとめた小委員会は、評議会の事務局 (paruman welaka) はジャカルタに移し、最高位の祭司たちからなる幹部会 (paruman sulinggih) はこれまでどおりバリ島に置くという折衷案を提示した。これが総会にかけられ、議論百出したが、結局委員会の提案どおり可決された [Bali Post 14 September 1991; Tempo 21 September 1991: 80]。

このあとこの問題について、『テンポ』誌のバリ人記者プトゥ・スティアPutu Setiaが、バリ島で発行されている日刊紙『バリ・ポスト』に長文の寄稿を寄せている。その中で彼は、今回の会議がインドネシア全体のレベルのものであるにもかかわらず、ジャカルタの報道関係者に十分な知らせがなされていなかったことや、会議の招待者の名簿第一位がバリ州知事であり二位が宗教省ヒンドゥー教・仏教局長であって、宗教大臣が招待されていなかったことなどをあげながら、ヒンドゥー教の国民レベル化が立ち遅れていることを危惧している [Bali Post 26 September 1991]。

さらにそのプトゥ・スティアが議長となって、翌月の10月9日にインドネシア・ヒンドゥー知識人フォーラム (Forum Cendekiawan Hindu Indonesia) がジャカルタで設立された。これは既成のヒンドゥー教組織から離れた自由な立場で、ヒンドゥー教の問題のみならず他の宗教との関係やインドネシアがかかえる今日的な問題についても発言を行なっていくとするもので、ジャカルタをはじめバンドゥンおよびバリ島に居を置く祭司、法律家、企業家、記者、国家公務員、大学教員、軍人などからなる18人の運営メンバーで構成されている [Bali Post 10 Oktober 1991; Tempo 19 Oktober 1991: 33]。

こうした最近の動きを見ているとたしかに、バリのそれも含めたヒンドゥー教を地方レベルあるいは民族レベルのものから国民レベルのものにしてゆこうとする動きが、役所やヒンドゥー教評議会の側だけでなく信徒の一部にも広まってきていることがわかる。しかしそのいっぽうで、たとえばバリ島では、押し寄せる観光客や近代文明の産物を前に、バリの文化的アイデンティティを維持するものとして、つねに慣習 (adat) が取り沙汰される。さまざまな地方の催しに招かれた役人の挨拶では、地方の慣習を堅持しなければならないことが、繰り返し強調される。また、慣習村品評会 (Lomba desa adat) なるものが県、州レベルで開催され、それぞれの地区の代表が、制度も外観も含めていかに村の慣習を整備・維持しているかを競ってい

る。こうして整えられる慣習が、昔ながらのそれそのものでないことは言うまでもないが、バリ島に住むバリ人のアイデンティティの中心に位置するものであることは疑えない。そしてここではヒンドゥー教は、そうした慣習が生まれ育まれる源泉として位置づけられている。<sup>24)</sup>

慣習はもともと地域に根ざしたものであり、その住民のアイデンティティが云々されるときにそれが強調されるのは、ある意味で当然のことである。いっぽうジャカルタのバリ人のように、地域へのかかわりが慣習というものを介しては満たされない場合には、そのさらに根源にある原理を求めざるを得ないことも理解できる。たとえその原理が、彼らにとって昔から本源的なものであったというよりは、現代のインドネシアという状況の中で必要とされ新たに整備されたものであったとしても、である。このふたつのかたちは、それぞれの状況に応じて選択されたものであり、少なくともそれらの状況が大きく変化することがないかぎり、一方から他のほうへ漸次推移していくようなものではないように思われる。<sup>25)</sup>

## おわりに

提示した資料の範囲をこえて、少々一般的な議論にまで踏み込み過ぎてしまった。本題にかえて、ジャカルタのバリ人の活動を云々するためには、今回見聞できなかった葬儀や結婚式の行なわれ方のほか、ジャカルタへの移入の契機、婚姻関係と配偶者の選択、家庭内外でのコミュニケーションの際に使用される言語の問題などについて、さらに調べてみる必要がある。

ここで検討してきたように、現代のインドネシアにおいて、民族、宗教、慣習という三つの項目は、それぞれが互いにいろいろななかたちで結びつきあいながら、重要で微妙な役回りを果たしている。ジャカルタのバリ人が、その興味深い例のひとつを提示するものであることは、本文で示したとおりである。

## 参考文献

Abeyasekere, Susan. 1983. Slaves in Batavia: Insights from a Slave Register. In *Slavery, Bondage, and Dependency in Southeast Asia*, edited by Anthony Reid. St. Lucia: University of Queensland Press.

24) こうした位置づけは地方政府関係者の挨拶などでかならず聞かれるものであり、主として施政者やヒンドゥー教指導者の側の見解であると言える。一例をあげれば、ある村の寺院の祭りに招かれたバリ州知事が挨拶のなかでそのように述べている [*Bali Post* 27 November 1991]。

25) したがって、福島 [1991: 199] がその結論で、「世界宗教 (agama)/地方慣習 (adat) という二項対立の左項に、バリ (略) が巧みに滑り込んだ」としているのは、正確に言うとバリ・ヒンドゥー教のなかに、左項 (宗教) に強調を置くものが右項 (慣習) に強調を置くものから遊離して生じたということであり、福島が描く左項に対する右項の闘争は、カリマンタン (Kaharingan) やトラジャ (Aluk To Dolo) やジャワ (Tengger, Keбатinan) ばかりでなく、バリ島でも生じていることである。そしてバリ島の現状を見るかぎり、慣習の側の抵抗がやがて宗教の圧力に屈するだろうと推論するのはまだ早いように思われる。

- \_\_\_\_\_. 1989. *Jakarta: A History* (revised edition). Oxford: Oxford University Press.
- Forge, Anthony. 1980. Balinese Religion and Indonesian Identity. In *Indonesia: The Making of a Culture*, edited by James J. Fox. Canberra: The Australian National University.
- 福島真人. 1991. 「『信仰』の誕生：インドネシアに於けるマイナー宗教の闘争」『東洋文化研究所』113: 97-210.
- 鏡味治也. 1991. 「週刊誌から見たバリ：『テンポ』誌が伝えるバリ関係記事の分析」『金沢大学文学部論集・行動科学科篇』11: 67-91.
- 加藤 剛. 1986. 「インドネシアの都市にみる種族結合：ネットワークと同郷会」『東南アジア研究』23(4): 391-418.
- 古屋野正伍 (編). 1987. 「東南アジア都市化の研究」京都：アカデミア出版会.
- 村井吉敬. 1984. 「スンダ人とスンダ世界」『東南アジア研究』22(1): 75-91.
- Statistik Indonesia 1989*. Jakarta: Biro Pusat Statistik.
- van der Kraan, A. 1983. Bali: Slavery and Slave Trade. In *Slavery, Bondage, and Dependency in Southeast Asia*, edited by Anthony Reid. St. Lucia: University of Queensland Press.
- Vickers, Adrian. 1989. *Bali: A Paradise Created*. Berkeley: Periplus Editions.
- 山下晋司. 1986. 「ウジュン・パンダンのトラジャ社会：インドネシア地方都市研究」『東南アジア研究』23(4): 419-438.

新聞・週刊誌

*Bali Post*

*Kompas*

*Tempo*